

小さき蛾たちの祭り、山で

白い闇。その中を雨粒がしたり落ちている。

ゆっくりと登るにつれて乳の色は濃くなり、ひとりさまよっているような感じがまさつてくる。温泉峡に向うときによくあるような谷沿いの道、その先には実際には山の中腹に古びた団地群がはびこっているのだが、今日は風景が変わり、どこか別の世界へとくぐり抜けていくようだ。左手の河原の、色を失った木立はたたずむ人群れのようにだし、ときおりぼんやりとあらわれては去る対向車のヘッドライトも、靈気を帯びたように生物じみている。そしてすべてのものがしっとり濡れ、薄い光を帯びている。こんな霧は、ものを隠すようでかえつてももの正体を明かしてしまうのかもしれない。山の地肌からわきだした靈気は、すべてのものの奥深い性質を呼びおこしてしまうのかもしれない。窓を少し開けるとそれはおもむろに侵入してきてまつわりついてくる。皮膚や髪をしっとり濡らし、内側まで入ってくる。

そのバス道が急カーブして橋にかかる手前を右に折れ、徐行に近いスピードでさらに登る。大きな霊園へとたどる道で、急に人家が絶える。でもわたしは墓場などに用があるのではない。男に逢いにゆくのだ、あの若い男に。

さつきよりは小さな谷に沿う道で、対向車にも会わず、ひとりでさまよっている感じはますます深まってくる。ゆっくり走ると意外に深い山の中だ。いつもこの街は不思議だ、海の近い下町から車で十五分も登つてくるともうこんな山の気配を見せて、人かげが絶えてしまうのだから。

霧の中にぼんやりと砂防ダムの姿があらわれた。中ほどを落下する白い水の量がいつもより多いようだ。坂道はその手前で折れて霊園の入口のほうへとさらに登っている。わたしはその曲り角のわずかな空地に車を入れ、そのままお進んで、土置場の土の小山をゆつくり廻りこむ。するとダムに面と向う場所に見なれたバンが停まっている。インテリア会社のネームのついた営業車。その隣りへ、自分の車をすべりこませる。待ちかねたようにバンのドアが開き、男の顔がわたしを見おろしている。ロックのさわがしいリズムも同時にこぼれてくる。わたしはちょっとルームミラーをのぞいて湿った髪を撫でつけてから、男の車にうつる。白いものを身体にまといつけたまま、男に抱き寄せられる。

「遅かったな」

男は退屈していたらしい。

「ごめんね。でも出にくかったの」

でもわたしは本心から詫びているのではない。下町から霧の山を見て、男に逢うことよりもその白いあいまいさの中に入っていくことにわくわくしていた。山に呼びよせられる

ように、嬉々として出かけてきただけだ。

裕二はカーステレオのポリウムを落とし、あたりのようすを少し窺ってからシートを倒す。すべていつもと同じ動作、同じ表情で、もの馴れたようすが少しいやらしいと思う。裕二にとっては、この営業車の中の密室も、わたしの嫌いなあのラブホテルと変わらないみたいだ。強くこもった煙草の臭いがセーターに染みつくのもいや。車の後部には、どこかへの配達品か、クロス束が積んである。その真新しいクロスには、煙草の臭いと性においが染みつくだろう。

狭い所で、閉めきつているので、すぐ汗ばんでくる。若い裕二はせわしく動いて、わたしを休ませない。息苦しくなって、あえいでしまう。目を閉じると、まぶたの裏にも白いものがあふれている。わたしは霧に抱かれていると思う。

裕二が煙草をつけ、またカーステレオのポリウムを上げるので、

「それ切つてよ、うるさいわ」というと、「そうかな」とちよつとけげんな顔をして、切る。やつと静かに外を眺めていられる。短いカーテンを避けて窓を少し開けると、十メートルほどの落差をすべり落ちていく滝の音が、激しい。そのダムの上にも、濃い霧の群れが白い炎のように流れている。

「陰気だな、こんな天気。湿っぽくて。何も見えないし」

裕二はもう退屈して、自慢の古いジーンズの細い足を小刻みに揺らしている。

「わたしはそうでもない。好きよ、こんな霧の山。温泉に来たみたいじゃない」

「奥さん、山、好きだからな。また休みの日にダンナとでも登ったの？」

「ううん、ダンナとなんか登らない。ひとりだよ」

ダンナ、ダンナ——わたしは思い出すが、午前中裕二が配達に来たときに三人は店で顔を合わせたのだった。野球のチームがどうか、不景気だとか、変わりばえのしない話題を冗談をまじえながら楽しげに言いあう男二人。わたしは店の奥のほうにいて、話にはまじらないが、しきりに裕二が秋波を送ってくるので、隙をみて裕二にだけ見えるように指を三本立てた。「三時に」。裕二はいつものように、ダンナとの話の途中でうまくわたしにうなずいてみせる。そのタイミングが絶妙なので、わたしは吹きだしそうになった。ダンナはそんなことに気づいているのかどうか。でもダンナのほうもわたしにおかまいなくけっこう派手に遊んでいるわけだから。夜の寄り合い、得意先とのつきあいというのが、やたらと多いのだ。店の家具の間をせわしそうに歩きまわりながら、でも頭の中では次に逢う女のことをあれこれ考えているにちがいないのだ。

わたしは三時近くなつて、買い物にかこつけて店を出てきた。ダンナはレジに坐つて雑誌を読んでいた。一人いる従業員の男の子が、接客中なのに大声で、いつてらっしゃあい、というのでちよつと気恥ずかしい思いをした。

「ひとり山歩きか。奥さんは変わってるな。俺なんかそんな暇あつたら……」

「街で女の子と遊んでる？」

「まあそんなところ」と裕二は悪びれるふうもない。

「若いからね、あんたは。わたしはもうオバサンだから、時々山へでも出かけて精気をもらってくる必要があるの」

「あんたまだオバサンじゃないよ。若いじゃないか、子供も産んでないし」と裕二は口では慰めるつもり、でも不思議なものを見る目つきをしている。

「奥さん、故郷は山のほうだった？」

「そうでもない。でも、山は近くて、よく遊びにいったわ」

「で、山がなつかしいわけだ」

「そうかな」

「そうか。フルサトのある人はいいよな。盆や暮れのため、俺、そう思うよ。ほら、そのころのニュースでよくやるじゃない、帰省ラッシュで高速道路が何キロジョータイして、まず、新幹線のジョーシヤリツは百五十パーセントです、とかって。あんなの見てると、俺、うらやましいなって思うよ。俺にもどこか、帰れるところがあつたらなって」

若い男のわかったふうな饒舌には、わたしは興味がない。それに、話のポイントをどうしてそんなふうにつづりの話にずらしてしまえるのか。でもわたしは明るく言う。

「今度、あんたを山へ連れてってあげる」

「いいよ、俺は」

「でも、今度は山で寝てみたいの」

「えっ？」と裕二はちよつと驚いた顔をするが、すぐ薄笑いを浮かべた。

「でも、どこで？」

「この山でいいわ」とわたしは谷を隔てた向いの山を指さす。

「そのダムのそばに細い道がついてるみたい。ほら、そのあたり。登山コースから外れた所だから、きっと人も来ないわよ。きれいだよ、今ごろの山は、紅葉して」

「おもしろいかもな」

まもなく、じゃあ俺、まだ配達あるから、と裕二はわたしを放り出し、さっさと走り去ってしまった。自分の小さな車に戻ったわたしは、でもまだしばらくこの霧の中に埋まっていたい。

化粧をなおすのもの憂く、窓を開け、背もたれに身体を投げて、冷たい霧に浸ってみる。そうしてひとりで息をひそめていると、しだいにあたりの静かなざわめきを感じられてくる。河原で黒く濡れそぼった木々の、ゆっくりと動くかたち、白い闇の向うからかすかに響いてくる鳥たちのさわざ。人かげなど何もないのに、まるで世界が裏返るように、白く流れるものの中ですべてのものがにぎやかにうごめいているのがわかる。わたしは、なぜだかなつかしいような気分になされる。

天気が好く、とりたてて用もない休みの日には、ひとりで山歩きをするのがここ数年来の習慣になってしまった。ハイキングの恰好で、でも人の多いハイキングコースは避け、つとめて人気のない小道を選んでたどる。名のあるハイキングコースは、人に会うたびに挨拶を交わしたりするのがいやだ。街なかでは会っても顔をそむけあうほどの他人どうしが、ちよつと山に入るとなぜか急に善人たちに変わってしまう、その落差に馴れない。また、たいていは大人二人と子供一人、二人の家族連れや、グループのハイカーに出会うのもうるさい。

それに、人気ない道のほうが、山をゆっくり味わえるのだ。海と山の間に細長く開けたこの街の、北側は衝立のような山並みが連なっている。標高はせいぜい七、八百メートルほどにすぎず、古くからハイキングコースやドライブウェイが開かれ、植林もさかんに行われて人手が入りすぎているが、それでも小道をたどると自然の豊かな感じが味わえる場所はまだまだたくさん残っている。散策の途中に、そんな気に入った場所に出会うと、わたしはそこに一時間も二時間も坐って、何をすることもなくただぼんやりと木や草や日の移ろいを眺めていることがある。

山の中で木や草にとりまかれているのが、とても好きだ。彼らの自由なざわめきを聴いていると、憂いを忘れる。木や草は実に表情豊かにしゃべりあう、木と木が、枝と枝が、木と草が、草と草が……。そして自由に変形もしている、伸びたり、縮んだり、やわらいだり、固くなったり……。彼らは動物のように、少なくとも人間のように、屈託がなさそうに見える。大地に根づいている分だけ、日々生きていくことにあくせくしないでもいられるのか。この地上では、動物よりも彼らのほうがよりまともな生き方を選んだのではないか、と思えることがある。自分も、一本の木であつたら……。

そうしてわたしは山の中に坐って、木の精や草の精といっしよに、何かを待っているのかもしれない。山の奥から風のようにやってくる何ものかを。

遠い記憶の中に、祖母の声がある。

△山にはひとりで行くなよ、とくに娘はな。コワイ山の鬼にさらわれるぞ。さらわれたら、もうめつたに帰ってこられんぞ。山の中にはな、鬼の御殿があつての、それは立派な御殿じゃそうじゃが、その中で人間の女が大勢召し使われておるそうじゃ。女たちは、みーんな里からさらわれていったんじゃ。家来の鬼たちがいつも見張っておつて、逃げることもならん。そいで、役に立たんようになつたら、みーんな食べられてしまふとよ……▽

わたしは山里に育つたわけではないけれど、学校の長い休みにはよく弟といっしよに、山奥に住んでいた母方の祖母の家に出かけたものだ。大きな川に沿って、バスを乗り継ぎさかのぼっていくと、深い山の中の川が合う所に小さな村があり、一軒家に祖母がひとり

で暮していた。そのころもう七十をこえていた祖母は、いつも着物を着て、丸髷を結び、櫛をさしていた。そこで何日かすごしながら祖母の話をお聴していると、山はただの自然でもただの未開でもなく、人間界とは別の世界なのだった。山には人間ではないモノたちがにぎやかに住んでいる。だから人間は、できるだけそれらのモノたちの暮しの邪魔をしないようにして暮さないといけない。そうでないと、彼らは怒って何をするかわからない。中でも山鬼は、それでなくとも時々人間に悪さをする……。

弟や親戚の子供たちといっしょに、よく山で遊んだ。そして祖母のことばにかかわらず、わたしは山をあまり恐れなかった。スギやヒノキの森にはよく朝霧夕霧がかかり、雲の海を泳ぐようだった。山はたしかに平野の町などとはちがって、何か正体知れないもの住む、奥深い所だった。そしてそのころ、少女のわたしは山で何度も山の鬼に出会ったのではなかっただろうか。木立の向うに見えかくれする黒ずんだ影、姿もないのにざわざわと藪を進む音……。わたしは不思議にその気配に敏感で、またそれを恐れず、むしろ惹かれた。その得体の知れないものについていきたかった……。

△おばあちゃん、でもほんとうは、山の鬼つて、たくましい山の男のことではなかったの？ほんとうは、山にはすてきなたくましい男が住んでいて、時々村の娘をさらっていく。お嫁さんにするためにね。さらわれた娘は、山の奥の立派な御殿で、男に愛されながら幸せに暮すの。人間界のような憂いも心配事もないの。だから、帰る気にならないのよ。

ほんとうは、おばあちゃんもそれを知っていたのに、ウソをついたのではないの。わたしがさらわれないように。でもわたしはそのうち、山の男に遭うかもしれないわよ。いいえ、遭いたい。あのころからずっと、わたしは心の底で山の男に遭いたいと思いつづけてきたのかもしれないわ。

だからもし遭えたら、もうわたしを引き留めないでね。わたしはもう、娘の時代はとうの昔に卒業したわけだからね▽

ダムのそばから急な道がついていて、木の根や幹をつかみながら先に立って登っていく。裕二はあまり気乗りがしないようだったが、わたしがかってに車から離れて歩きだしたのでしかたなくついてくる。少し登ると雑木林で、南斜面のほうへゆるやかな登り降りの細い道が続いている。

好天で、晚い秋の午後の少し赤味を含んだ光が山の色を引き立たせている。あたりにはもうクヌギやコナラやヤマグリなどの落葉が散り敷いて、ススキやカヤやスゲの類の下草も枯れ色になり、ミヤコザサやネザサ、それにシダの類の地味な緑が目立つようになっていく。誰も採りに入る者がいないのか、ヤマグリの実は落ちたままで、果肉を食べられたアケビのしなびた皮が目の高さにぶらさがっていたりする。めずらしくまだ赤い実をつけて

いるのは、ガマズミやサルトリイバラ。幹に棘のある低木やノイバラが多く、ふだん着なのでわたしは注意をしながら歩く。それでも脚にイノコヅチの種などがまつわりついてくるのは、避けようがない。山から下りたときに取っておかなければ。

ヒヨドリが鋭く鳴きながら、餌を求めて低く渡っていく。

「へー、はじめてだな、こんな所」と裕二はなつかば愚痴のように言う。さすがに遅れはしないが、見ているとジーンズの細い脚がたよりなく、それにむだな動きがずいぶん多い。それで早くも息が乱れている。何度も足もとのノイバラにからまれ、悲鳴をあげている。

かまわずわたしは先に進む。少し開けた原に出た。ゆるやかな南斜面の一部で、まばらな木々に斜めから光線がおだやかにそそぎ、ところどころ葉がきらめいている。きれいな所だと、わたしはその原がたちまち気に入ってしまう。

何となく、一本のクヌギの大木の根もとに腰を下ろす。そのごつごつとコルク質の張った幹を撫でてみる。かわいた落葉からおぼしさが匂い立つ。見あげると無数の色づいた葉裏が、日を透かし、重なりあつて紋様を描き、春の花よりも美しい。そしてわずかな風のそよぎにも敏感に反応して、ゆっくりと舞い落ちていくものがある。物語の終りのように。

「何だか気味悪いな。何かでそうな感じ」

横に坐った裕二は、むやみにあたりを眺めまわして落ち着かない。わたしはその弱気をおもしろがって、

「マムシはもう出ないけど、イノシシなら出るわ」と意地悪く言う。

「へー、そんなもの出るの？」

「ええ、よくいるわよ、このあたりの山には。来る途中でもみかけたでしょ、イノシシのフン。イノシシが掘り返している所もあったわ。そのほかにもね、木の精や山男や、何でも出るんだから」

「おどかさないでよ、奥さん」と裕二はかよわく笑う。

「でも、人間だけは来ないわ、こんな所には。だからだいじょうぶよ」

わたしはその場に仰向けに寝ころぶ。目を細めて、光る紅葉の中から男の顔が落ちてくるのを待っている。根もとから二つに分かれた幹の、大きな幹のほうはさらに途中で分かれ、また絡まって、男女が逆さに抱擁しているかたちに見える。木の中で、永遠に抱きあっている。

「でも、誰か来るかもしれないよ。ハイカーなんかさがさあ」

裕二はまだ落ち着かない。

「だいじょうぶよ。このあたりにはハイキングコースなんてないもの。それに平日のこんな時間帯に、こんな山、誰も歩かないわ」

「近所の子供が遊びに来たりして」

「それもだいじょうぶ。子供たちはね、山へ遊びに行つてはいけないって親に言われてるから。イノシシが出てあぶない、とか言つて。それに、このごろは塾や習い事が忙しくて、山で遊ぶどころじゃないでしょ、子供たちは」

「ふうん、そうか」

「子供たちも大人たちも、山に背を向けて暮してるのよ、この街では。せいぜい、休日になつて、親子そろつて森林浴とか、バードウォッチングとかね。それも、皆が行くコースしか歩かない」

「へー、さすが奥さん、よく知ってるねえ。これからは山の先生つて呼んでもいい？」

「感心した？」

「しないでもない」

ようやく裕二は顔をわたしの上に重ねてくる。木の幹のそばからあらわれたので、わたしは木に抱きとられたような気分になる。その木が動いている。木の中を水が流れ樹液が流れ、かたちが変わつていく。いっぱいの色づいた葉におおわれ枝にからまれ幹に圧され、わたしはうめき声をあげてしまう。

木の動きが止まると、わたしは慰められている。このまま、木のそばに埋まったままで、風や雨を受けたり空を眺めたりまた木と抱きあつたりして、永い時間を木とともに生きられたらどんなにいいだろう。

「こんなのも刺激があるね。そうか、奥さんこんなのが趣味だったんだ」

無神経に言う裕二を、わたしは顔を朱らめながら憎む。その男の顔も身体も、そこらに転がっている朽ちた棒切れほどにすぎない。立ちあがつてわたしは、さっさと道を引き返す。

今ごろは、落葉樹の多い山は、目に見えて空(す)いてくる。まだわたしの目の奥には、夏の草木の濃密なはびこりが灼きついているので、そのすばやい後退におどろき、空いていく場所のうつろな感じに引きこまれそうになる。春の新芽のころもいだけれども、今ごろの空いていく山がとても好きだ。葉を脱ぎすてるにつれて木の裸身、山の裸身がまたあらわれてくる。そして、眠りに入るために忙しく準備している山を感じる。

クヌギの原からさらに進むと小さな谷川に出会い、そのかたわらの細道をたどつていくとまた砂防ダムにぶつかる。その手前で小川を渡り、斜面を尾根筋のほうへと登つていく。花崗岩の細かに砕けたのが厚く道をおおい、急勾配なので踏むたびにそれが下へとずり落ち、足をとられる。まるで白い小石の小川のように。大雨でも降れば、実際の、あたりの小石が集まって流れ落ちていくのだろう。

「まだ登るのかよう。もうやめようよ」と行きしる裕二にかまわず、わたしは砂穴を這

いのぼろうとするアリみたいに、懸命に木の根や幹にすがりながら登っていく。登れば何かいいことがあるみたいに。冷気にかかわらず、下着が汗で濡れていく。

ようやく尾根筋に出、少し休む。木の根のそばに身を投げて息をととのえる。左手の、谷を二つ隔てた向うに霊園の景色がせりあがっている。それは、一つの端山全体を城郭のように整形したもので、すさまじい眺めだ。その中のどこからか工事の音がこだましてきて、まだその城郭は延び広がるつもりらしい。街の植民地のような、異様な白い墓の街。ふと裕二が、

「ああ、俺たちの車だ」といつて笑う。

たしかにその霊園の下のほうの谷筋に、ちよūd白い営業用のバンと赤い軽自動車が並んで見えて、わたしも笑ってしまう。まるで二匹の虫。あんなところでひそかにくっつきあつていったい何をしているの。霊園の中の道路を、土を載せたトラックが一台、走りおっている。その音がすごく耳に近い。それは、むつみあつている二匹の虫を粉碎しそうな勢いで走り下つたが、思い直したように急カーブしてそれていった。

尾根筋をなお少したどると、アカマツとクロマツの制している一つの頂きに着いた。南に向いて坐ると、梢の間から街が見わたせる。裕二はやや元気になって、いい眺めだと言、あのビルが何、あの道路が何などと指さしてはしゃいでいるが、わたしはそんなことには少しも興味がない。せつかくここまで登ってきたのに街が近すぎる、と思ってしまう。何もなければ、どんなにすっきりした眺めだろう。ずっと昔には、原に森に川、それだけで、山と海とが今よりもずっと親しかっただろう。山は山らしく茂り、海は海らしく青かつたか。それはどれくらい昔の風景なのか、見当もつかないけれど……。

でも結局わたしは、その場所も気に入った。尾根から尾根へとさかんに風がわたっている。北側の衝立のような山並みを越えてくる、冷たい風だ。セーターの内側で汗がいそいで冷えていく。南西側の斜面にはマツやアラカシなどの常緑樹もまじっているもの、やはりクヌギやコナラの多い雑木林で、足もとからその林の奥までずっと、一面の落葉がまだら模様を描いている。西の空からときおり薄日がさすと、林全体がほのかに明るんで何ともいえず美しい。ここを「見はらし台」とでもひそかに名づけ、また来てもいい……。

さつきから時計を気にしている裕二は、わたしがなかなか腰をあげようとしないので腹を立ててしまった。でもほんとうは、ダンナに怒っているのかもしれない。今日は午前中、裕二がいつものように「毎度……」と納品に来たとき、ダンナは機嫌が悪く、前の納品に傷がついていたといつて、くどくどと文句を並べた。このごろはそういうことが多い。ダンナは、わたしたちのことを勘づいたのかもしれない。わたしの「買い物」の時間が長すぎるから。でもそれがどうだというのだろう。自分も好き勝手にやっているのだから。

そのとき裕二はまじめな顔をつくって小言を聞いていた。そして卑屈なくらい、何度も頭を下げていた。でも腹の中では舌を出していたのにちがいない。いつもわたしには、ダ

ンナを小ばかにして悪口ばかり言っているのだから。

それでも少し困っているの裕二に、わたしは意地悪くいつものように指でサインを出してやった。裕二は気づかないふりをして顔をそむけたが、わたしは懲りずに何度もサインを送った。とうとう裕二は折れてうなずくしかなかった。そのことで裕二はさつき不平そうにわたしをなじったけれども、でもわたしはこうして山に来たかっただけだ。

いつまでも動こうとしないわたしに、ついに裕二は、

「俺、もう帰るよ。まだ配達も残ってるんだから」と声を荒げた。わたしは軽くうなずくだけ。裕二は立ち去ろうとして足をすべらせ、ころんでしまった。ついわたしは笑い声をもらす。ふり向きざま裕二は、形相を変えて、

「奥さんは変わってるよ。つきあいきれない。こんな山がいいなんて。あんた、きつと人嫌いなんだよ。街には住めない。離婚して田舎にでも帰れよ。ダンナのことも嫌いなんだし。そのほうが似合ってるよ。いい人生、送れるよ」

それだけ言うときつきさで行ってしまった。

そうかもしれない。

風がいつそう冷えてくる。低い雲が背後の山からあらわれて急速に空をおおい、初雪でも降りかねない気配だ。日はとうに西の空にかげって、小暗さがましてくる。でも冷たい風になぶられながらわたしは心地よい。じっとしてただまわりの変化を樹木の皮膚のよう感じていたい。せいぜい風がわたしのなかに吹きこむように。そうして山の力が、わたしを生け捕りにして、もつと山の奥のほうへと連れ去ってくれるように。

裸の梢が鳴り、葉裏がひるがえっている。風が舞って斜面の落葉が浮きあがり、一吹きごとにおびただしい枯葉がわたしをねらい打つように舞いあがってくる。皮膚にあたると痛いくらいで、目もあけていられない。隣りの峰でも、同じように落葉のあらしだ。ふとそこに、何かが動いた。黒ずんだ人のかたち、わたしはどきりとする。ハイカーなんかではない、とうとうあれが、長い間待ち望んでいた山の男があらわれて、わたしをさらいにかけてくれたのか。あのたくましいものが……。

でもそれは、尾根の上から街のほうを見わたしていると思ったら、あっけなく後ろに走りだした。そうして落葉を巻きあげながら、毛物のようにすばやく駆け登って、深い森の中へ飛びこんでしまった。

男はまだ来ない。わたしはクヌギの下で待っている。いや、待っていない。

クヌギはもうすっかり葉を落とした。裸形を無防備に宙に開いて、わずかに息づきながら、まどろみの季節に入っている。背後の斜面もあたりの藪も、落ちるはずのものは落ちつくし、枯れるはずのものは枯れつくして、山がすっかり空いている。

わたしはいったいここで何をしてるのだろう。どうしてわたしは今、ここに居るのか。冬枯れたものばかりに取りかこまれてうつろに坐っていると、場所の感覚も時間の感覚もしだいに淡くなってきた、何もかもが夢のように思える。今の暮しも、この街に来てからの短くはない年月のことも、それから、子供のころのことさえも。ずっと前から、もしかすると生まれる前から、ずっとわたしはここにこうして坐りつづけていたのではないだろうか。人なかにまじって何かをしてきたことなど、なかったのではないだろうか。

それにしても、この、さかんな蛾の踊りは何だろう。原一面に小さな蛾がおびただしく舞い立っている。それらは枯草の間や落葉の上に潜んでいるらしく、時々飛び立ってはまたもとの場所に舞いおりている。さっきわたしが歩いてきたときには、つま先から次々と舞いあがって、まるで絨毯がめくれあがっていくみたいだった。その一匹を手の中につかまえてみると、広げた翅の長さが二センチにも足りない、くすんだ土色の地に小さな朱の紋様のある翅の、ごく地味な蛾だった。

こんなのは見たことがない。こんなに無数にいるのも。前に来たときには気づかなかつたから、ここ数日でいつせいに生まれたものか。それに、ここに来るまでは見なかったから、日当たりのよいこの原だけに生まれたものか。毎年こんな初冬のおだやかなころに、人知れず地から湧きだすように生まれるものか。木も草も、もう眠りについたころだというのに。

でも眺めていると、それらは自分たちだけで楽しんでいるようなのだ。地を這っている小さな一匹一匹が、思いついたようにほんの数センチ薄日の中に浮き立ち、つかの間、宙でひらひら踊って舞いおろるという所作をくり返している。それがこの原一面のことだから、にぎやかだ。自分たちだけの、晚い祭りをしてみたいだな、眠りの季節のはじまりを祝うみたいに。音もたてずに、消えやすそうに……。

あなたたちは、どこから来たの？もしかすると、あなたたちは霊？山で死んだものたちの生まれ変わり？そしてそんなにさかんにダンスして、また求愛の相手をさがしてるわけ？そして枯葉や草のかげで生殖してるの？そしてそれからどこへ行くの？

わたしは待っている。山からやって来る男を。あの黒い影を。

西に傾いた日のほうへ、ヒヨドリの群れがかしましく鳴きかわしながら、争うように飛び去っていく。今ではめずらしくなった、赤い実でも見つけたか。空の高みを、一羽、二羽とカラスが帰っていく。もう東の空には半月。うつろな半月。

日がかげってくる。わたしは立ち上がって歩きます。また小さな虫たちが、祝福のように舞いあがる。

川沿いに登る。ダムを過ぎ、斜面を登り、「見はらし台」にたどりつく。マツの制する頂きを過ぎ、尾根道をさらに奥へと進むうちに、ぎっしりと生え広がったミヤコザサの群落の中で道を見失ってしまう。踏みはずして、谷に落ちてしまう。しばらくは動けず、倒れ

たまま……。

谷底に闇がたまってくる。急に冷たい風が吹きおろしてくる。落葉が嵐のように降ってきて谷を埋める。それは男の気配にちがいない。男は、高みに立ってわたしを見おろし、誘っているのだ。

△おばあちゃん。やっぱ山には男がいたんじゃないの。たくましい山の男が。おばあちゃんはやっぱりウソをついたのね。でもいいわ。もうすぐわたし、男に遭えるのだから。やっと遭えそうなんだから。あのころからは、もうずいぶん時間がたってしまったけどね。でも遭えるのだから……▽

急な斜面を這い登る。息がきれぬ。枯草にすべり、棘に傷つき、服が破れる。山の高みで男は、笑っている。わたしがそこへやっとなどりつきそうになると、笑みを残し身をひるがえしてさらに奥のほうへ、森の中へ中へとわたしを誘う。

幻を追いかけながら、でもわたしは自由……。

神野麻郎のホームページへ